

上智大学英文学会

第42回大会プログラム

と き 2017年10月28日（土）

ところ 上智大学7号館14階特別会議室

I 13:00 総会

開会の辞

会長・上智大学英文学科教授 池田 真

活動報告・会計報告

事務局

II 研究発表

13:10 「フィリップ・シドニー『欲望の四人の里子たち』に見られる

エリザベス一世への不満と策略」

上智大学大学院博士前期課程1年 南 ひかる

司会 上智大学言語教育研究センター 杉木 良明

13:50 The Language of the Community and the Individual:

Quentin's Belief in the Power of Language and Its Limits

上智大学大学院博士前期課程1年 浜田 祥子

司会 日本大学生産工学部准教授 平塚 博子

III 講演

14:40 『風と共に去りぬ』とアイルランド表象

講師 東京外国語大学名誉教授 荒 このみ

司会 上智大学英文学科教授 増井 志津代

IV 16:30 閉会の辞

大会準備委員長 増井 志津代

V 17:00 懇親会 ソフィアンズ・クラブ（6号館6階）

会費：4,000円（大学院生・学部生は2,000円）

〈研究発表〉

フィリップ・シドニー『欲望の四人の里子たち』に見られる
エリザベス一世への不満と策略

大学院博士前期課程 1年 南 ひかる

本発表では、1581年にイングランドで行われた野外劇『欲望の四人の里子たち』(The Four Foster Children of Desire)に、エリザベス一世への不満が織り込まれていることを指摘する。この野外劇は女王と、その頃彼女に求婚していたフランスのアンジュー公フランソワの使節団の前で演じられたものであり、使われているモチーフや言葉遣いの特徴から、その主な執筆者はフィリップ・シドニーであったと言われている。

廷臣の「母」や「恋人」など女王の様々なイメージを造り上げて提示する役割を担っていたのが行事や式典である。本発表で扱う野外劇において、女王は恵み深い「地上の太陽」または誰も手に入れることのできない「完璧な美」として賛美される。シドニーらが演じた「欲望の里子たち」は、「美の城塞」に包囲攻撃を仕掛けるものの、堅固な守りに阻まれて最後には降伏する。このように、皆に望まれる存在でありながら難攻不落の「美の城塞」を称賛する劇は、表向きには美しくかつ強いという女王の美点を強調するものであったと言えよう。

しかし、この劇が女王賛美だけを目的としていたのかどうかについては疑問の余地がある。なぜなら、シドニーらは演技ではあるものの女王に反旗を翻しており、また女王が叶う望みの無い欲望の源であると示唆されているからだ。「里子たち」に「美の城塞」への攻撃を唆した里親の「欲望」は、実は「この城塞から生を受け、養われた」とされている。つまり、女王は美しい恩恵の源であるだけでなく、欲望の源でもあるのだ。そして、その欲望は叶えられないものである。「美の城塞」の守りは完璧で、戦いに敗れた「里子たち」は「不幸しか相続できない」と嘆くことになる。

このように女王を恩恵だけでなく叶えられない欲望の源と捉え、廷臣の扮する「里子たち」が女王を象徴する「美の城塞」に攻撃を加えるという物語の背景には、シドニーの不満があるのではないだろうか。なぜなら、シドニーは常々外交の職に就くことに関心を寄せていたが、アイルランド総督の地位を父親から引き継ぐことや、国外での継続的な外交の職に付くことを認められずにいたからだ。

「運に恵まれていない」と訴え、「美」に仕えることを「奴隷なる」と表現する「里子たち」には、宮廷に留め置かれて思うように外交活動ができないシドニーの不満が込められていると言えよう。

The Language of the Community and the Individual: Quentin's Belief in the Power of Language and Its Limits

大学院博士課程前期 1 年 浜田 祥子

Through his works, William Faulkner (1897-1962) created an imaginary community, Yoknapatawpha County. Within those works which portray the people and land of the County, the community's relation to the individual is a central theme. Critics have also noticed this theme in *The Sound of the Fury* and have discussed it in a variety of ways. Cleanth Brooks, for example, points out the importance of community in Faulkner's South and its power to stabilize itself after destabilizing actions. He reads the novel more as a story of a family with a unique problem than as that of the fall of the South. He seems to suggest that the cause of the fall of the Compson household lies within the family, not in the community. In other words, Brooks views the community as inherently stable while viewing individuals, like those in the Compson family, as something that have the potential to disrupt the stability of the community. John N. Duvall comments on Brooks' view of the community and argues that the community, in Faulkner's works, is not as accommodating as Brooks suggests. The theme of community and its relation to individuals has been discussed by many other critics from a variety of perspectives. In this presentation, I will also be focusing on the theme of the community and its relation to the individual, and will look closely at the language that the community and the individual use in the novel.

For this purpose, I will focus on the eldest son of the Compson Household, Quentin Compson. Brooks calls Quentin's narrative "mere obsessional impressions." I would argue that Quentin's is not merely an obsessional narrative, but one that is based on his belief in the power of language. Quentin's narrative is comprised of his thoughts and flashbacks during his last day before committing suicide. These thoughts and flashbacks show that Quentin sees language as a creative tool. He believes that by using language as a creative tool, he can create his own space when he cannot find one in the pre-existing community. However, what is also revealed through Quentin's narrative is that there are limits to the power of language that Quentin believes in. No matter how hard he tries to use language to create his own space, his language is overpowered by the language of the community.

By focusing on the language used by the community and by the individual I would like to argue that Quentin's narrative is not one of "mere obsessional impression," but a failed attempt made by Quentin to create his own space within a community that already holds its own language.

〈講演〉

『風と共に去りぬ』とアイルランド表象

東京外国語大学名誉教授 荒 このみ

ビートルズのジョン・レノンは、「たまたまアイルランド人だったら (The Luck of the Irish)」という歌を作りました。自分にはアイルランド人の血が2分の1か4分の1、流れていると言っています。英国リヴァプール生まれですからアイルランドに近い都会で育っています。父親からアイルランド人の血を引いていますが、反骨の精神はその民族的出自から生まれ養われたのかもかもしれません。反戦歌を作り、反戦運動に参加し、ビートルズの仲間ではジョン・レノンがいつも積極的にマスコミのインタビューに答え発言していました。

19世紀には多くのアイルランド人がリヴァプールのみならず、世界の諸国諸都市に移住しましたが、かれらはそれぞれの地域でアイルランド魂を育み、自分がアイルランド人であることを忘れることはありませんでした。

『風と共に去りぬ』(1936)の著者マーガレット・ミッチェルは、アメリカ南部のジョージア州アトランタに生まれました。アイリッシュ・アメリカン(アイルランド系アメリカ人)の両親を持ち、この町で育ちます。『風と共に去りぬ』の主人公スカーレット・オハラの父親もアイルランド人でした。スカーレットの母親はフランス系アメリカ人でしたが、この事実もまたアメリカ周辺の複雑な歴史的出来事を思い起こさせる重要な背景です。

今回は、アメリカ合衆国においてアイルランド人であることがどのように現れるのか、ということに焦点を定めて、この作品を読んでいきたいと思います。『風と共に去りぬ』からうかがえる「アイルランド表象」の意味を探りましょう。

『風と共に去りぬ』の時代背景は、1861年から65年まで戦われた、アメリカの歴史始まって以来の大きな内戦である南北戦争と、その後の再建時代(リコンストラクション)です。南部と北部の戦いでしたが、その昔、アイルランド人が英国の圧制に苦悩した歴史が、主人公スカーレットの父親ジェラルド・オハラによってしばしば語られます。ジェラルド・オハラは英国政府に追われて、ほとんど無一文でアメリカへ政治亡命して来ていたのです。ジェラルドの渡米から約百年たった1922年、アイルランドはようやく英国の自治領になり、アイルランド自由国としてその存在を認めさせます。けれども英国から完全に独立したアイルランド共和国になるのは1949年のことです。